和船の歴史

●世界の船の始まり

世界で最初の船は、数万年前に使われていたと推測されています。一万二千年前の新石器時代になっても、船の形は単純な「浮き」のようなものでした。やがて木や竹、草など身の回りで手に入る材料でいかだが作られるようになります。エジプトで発掘された紀元前四千年のものと推定されている花瓶には、アシで作られたと思われる船が描かれています。これが記録に残る世界最古の船です。

いかだ船が進化して、大木が得られる所では幹をくりぬいた「くり船」が作られるようになりました。

森林資源が乏しい地域では、細い幹や曲がった枝を組み合わせて骨格を作り、外側に樹皮や板状にした幅の狭い木材を張り付けて船にしました。また、樹木の育たないツンドラ地帯の人々は、獣類の骨をつなぎ合わせて骨組みとし、外側を皮で覆いました。これらを総称して「皮船」といい、洋式船や中近東の船、中世以降の中国船のルーツとされています。

●和船の変遷

和船とは、古くから日本で用いられた形式の木船の総称です。海に囲まれた日本で、この和船はどのようにして発達してきたのでしょう。その変遷は、大きく分けて以下の五つの段階に分けられます。

1、単材くり船

約五千年前には、一本の原木からくり出した船が作られました。静岡市の登呂遺跡や神明原遺跡から弥生時代の丸木船などが発見されています。

2、複材くり船

古墳時代（三～四世紀）に入ると、太平洋岸の各地で三～四本の原木を縦に継いだ複材くり船が作られるようになります。材料には楠が用いられました。

3、くり船式準構造船

複材くり船の出現と前後して、波浪を防いで積載量の増大を図るため、船の上縁に厚板（通称・タナ）を取り付けるようになりました。古墳時代から鎌倉時代にわたる約千年の間、タナを二段にしたり、舷（船の縁）を高くしたり、※オモキ造りを採用して船の幅を広げるなど、大型化は時代に合わせて進んでいきました。

※オモキ造り…くり船を船体真ん中で縦断し、その中間に同じ厚さの板を挿入して船幅を広げること。日本海各地で古くから行われてきた手法

4、前期日本型構造船

室町時代に入ると、製材の技術が進み、くり船部分が厚板に置き換えられて、これまでにない規模の大型船が造られるようになりました。伊勢船、二形船などがこの時代に誕生した代表的な大型船です。当時中国との貿易に活躍した遣明船も、そのどちらかの型に属します。また、上部構造を改装して厚い甲板で覆った日本最初の専用軍船、安宅船も、この戦国時代に登場しています。

一方、各地の海賊や水軍は、関船、または早船といわれる軽快な船を使っていました。この関船に初めて見られるのが、斜め前方